

追 悼



故 重松 秀一 先生 略歴

(昭和14年8月7日生～平成29年5月4日没)

<略歴>

昭和39年 3月 千葉大学医学部卒業
昭和40年 3月 日本鋼管病院実地修練終了
昭和40年 4月 千葉大学大学院医学研究科入学
昭和44年 3月 同大学院修了
昭和44年 4月 千葉大学医学部病理学講座副手
昭和44年 7月 千葉大学医学部解剖学講座助手
昭和45年12月 千葉大学病理学講座助手
昭和49年12月 同 講師
昭和50年 文部省在外研究員(ニューヨーク市立大学
医学部マウントサイナイ病院病理学教室)
昭和52年10月 千葉大学助教授
昭和54年10月 信州大学医学部教授
平成17年 3月 信州大学退官

<学会活動>

日本腎臓学会評議員
日本腎臓学会法人評議員
日本腎臓学会監事
日本腎臓学会功労会員
日本腎臓学会名誉会員

<日本腎臓学会 委員会活動>

評議員候補者推薦委員会
編集委員会
用語委員会

<受賞>

平成 2年 日本腎臓財団学術賞
平成23年 日本腎臓財団賞
平成27年 ロバート・ヘプチンストール永年功労賞

重松秀一先生を偲ぶ

松本大学人間健康学部

江原孝史

信州大学名誉教授重松秀一先生は、脳出血のため平成29年5月4日に亡くなられました。春の病理学会総会に出席され帰宅した直後に倒れられ、そのまま意識がもどることなく還らぬ人となりました。

先生は昭和54年に千葉大学から信州大学に着任され、以後25年間、四半世紀もの長い間、信州大学医学部病理学教室の教授を勤められ、腎臓病理はもとより病理学の教育研究に専念されました。平成17年3月に信州大学を退官された後も、腎生検の診断と指導に力を尽くされました。腎病理一筋の人生でした。多くの弟子を育てられ、幾多の業績を残されました。先生は実験病理なかでも実験腎炎の分野で数々の業績を残されました。馬杉腎炎で、マクロファージが関与していることを世界で初めて報告されました。Thy-1腎炎では、メサンギウム融解後の修復に血管再構築が必要であることを発表されました。メサンギウム細胞の形質転換に関する発表もされています。凍結割断によるディープエッチング法でメサンギウムの編み目構造も見出されています。臨床面では、IgA腎症の組織学的障害度(Grade)と進行度(Stage)に着目して、GradeとStageに基づくIgA腎症のG-Sシステムを提唱され、以後の分類法に影響を与えました。現在でもこの分類を使った発表をみる場合があります。退官後の平成27年には、腎病理のバイブルとも言えるPathology of the Kidneyを著したヘプチンストールの名を冠した賞を授与されたのも、その実績の重さを物語っていると思います。この受賞はわれわれにとっても嬉しい出来事でした。先生は常に時代の先頭を走り続け、形態学的手法を駆使して腎病理を研究されていました。病理標本を観察して得た結果から、形態学的研究手法を駆使して、本質を追究する姿勢は見事としか言えません。

先生の腎臓病理学の教育方針は、実験腎炎を通じて病態の変化を理解して、人体の標本を観察するというものでした。これは生検がまだ行われなかった過去においては、腎臓病の組織変化は病理解剖標本から得られたため、末期の病変を見ることが多く、実験腎炎で得られた成果が病変の変化を捉えるのに有効であったという事実が大きかったと思われます。そのため、大学院生をはじめ、研究生も動物実験をして論文にまとめるという方針でした。

重松先生は形態学を心から愛されており、病理のアーティストとも言える先生でした。先生からの年賀状はいつも自筆の絵を印刷したもので毎年受け取ることが楽しみでした。講演や講義では自身の手によるスケッチを披露されるのが常で、印象に残る絵を数々残され、懐かしく思われる先生方も多いと思います。学生の病理実習での板書には必ずプレパラートのスケッチを加えられ、糸球体腎炎をはじめとするさまざまな病変の組織像を独特の絵で表現されて、解説されていました。一通りの説明が終わると学生が黒板の前に集まって、その絵を写すのが恒例となっていました。教授室の真ん中にはどっしりとしたバノックス顕微鏡が置かれており、形態学が中心なのだと誇示されているかのようでした。大学院生をはじめとして、教室で先生の指導を受けた方々はみな経験のあるところですが、教授室にはいつか実験や剖検の標本を見ていただきながらいろいろなアドバイス、指示をいただいた思い出がこの原稿を書きながらあざやかに蘇ってきました。

重松先生の人を引きつけるお人柄のせいでしょうか。教室には留学生を含め実にさまざまな人たちが出

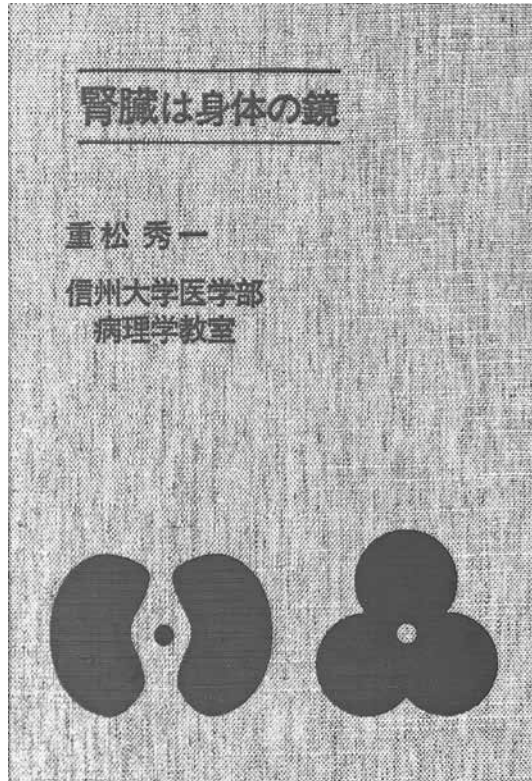


図 書籍「腎臓は体の鏡」(自費出版)

入りしました。重松先生の印象を表現するとしたら“おしゃれでさわやか”と言えるのではないかと思います。そんな先生でしたが、在職中はずっと病気につきまわれ続けていたのは残念なことでした。一時は心臓を悪くされたこともありましたが、在職中に現れた顔面神経麻痺は難治性で神経ブロックや脳外科の手術までされるなど、傍目でもつらそうでした。大変な御苦勞をされたことと思います。

先生は退官時に「腎臓は身体の鏡」というタイトルの本(図)を自費出版されました。就任から退官までのご自身と教室の業績を織り交ぜながら、腎病理に対する考え、自身の見解を一人でまとめられた大変に優れた著書です。この本からは、形態学を愛し、形態学的研究に限りない情熱を傾けたその仕事の一端を窺い知ることができます。腎臓は身体の鏡と言うタイトルを何故付けたか、その理由として、本文から引用させていただきます。—「腎臓は体の鏡」を本書の題名にしたのは、腎の病態が単に病理各論で出てくる各臓器固有の病変だけではすまず、全身系統的な疾患の反映が腎にはとりわけ強くでてくるということにある。—全身を見ながら腎生検標本を読み解くという意識を持って、普段から標本を見ておられたのだということは今更ながら思われます。

退官後も、さまざまな腎病理の検討会でコメントされていました。学会でも機会があるごとに質問して、老いてもなお変わらぬ学問に対する熱い情熱を感じました。いわば腎臓病理学の鏡として生き抜いたその姿勢にあらためて感動を覚えます。

先生は信州での生活も心から楽しまれ、春は大学近くのアルプス公園でのお花見、夏は乗鞍高原でのバーベキューと北アルプスをはじめとする山々に登られ、冬はスキーを楽しまれました。お酒もお好きで、飲み会の思い出は尽きず、お正月には先生の御自宅に集まるのが恒例でした。もうそんなこともこれからはないのかと思うと寂しいかぎりです。先生のご冥福を心からお祈りいたします。